

オンライン・シンポジウム「中国学研究と翻訳」 および「袁広泉さんを偲ぶ会」のご案内

【開催趣旨】

日本語と中国語の翻訳は、漢字語を媒介するため、同じ語句を使えるというメリットがある半面、微妙に食い違う語句もあるため、たやすいように見えて実は相当に難しい。一読して訳文だとわかる場合も多い。中国学に関する日本の著作を英語など他の言語に翻訳する場合の難しさはさらにいうまでもなく、中国について書かれた洋書を翻訳する難しさもまたしかりである。だが、翻訳なくして学の交流や伝播はあり得ず、研究の対外発信が要請される昨今、翻訳の意義はますます大きい。

今回のシンポジウムでは、これまで中国学にかんする翻訳を精力的に進めてきた三名の専門家（講師紹介は次頁参照）を講師に迎え、翻訳の意義、翻訳するものの選択、そして翻訳の技量や奥義について、縦横に論じていただく。あわせて、この5月に数多くの訳書を残して急逝した袁広泉氏（江蘇師範大学副教授、元京大人文研客員准教授）の訳業を検証し、その功績をたどる。

【実施要領】

日時 2020年10月31日（土）午前10時半開始

場所 京都大学人文科学研究所大会議室を中継会場とし、ZOOMを用いて
オンライン開催

公開開催、参加事前申し込み要

主催 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

【プログラム】

第1部 シンポジウム「中国学研究と翻訳」（会議言語：日本語）

10:30-10:40 開会挨拶・趣旨説明（石川禎浩 京都大学人文科学研究所教授）

10:40-11:10 「"日本語は難しいでしょう"と言われて：日本の中国研究を英訳してきた者の視点」（ジョシュア・フォーゲル カナダ ヨーク大学教授）

11:10-11:40 「どのような訳書を読者に届けるか——ルポルタージュから博士論文まで」（伊藤真 翻訳家・東洋大学非常勤講師）

11:45-12:25 「四面雲山皆入眼、万家煙火総関心：奇才袁広泉氏の訳業を振り返って」（楊韜 佛教大学准教授）

昼休みを挟み

第2部 気骨ある翻訳家の急逝を悼んで——袁広泉さんを偲ぶ

14:30 開始～16:30 くらい 【司会進行：村上衛 京都大学人文科学研究所准教授】

【申し込み方法】参加を希望される方は、(genchu@zinbun.kyoto-u.ac.jp) に10月28日までにご連絡ください。ZOOMによる接続の詳細について、開催が近づきましたら連絡させていただきます。なお、原則として、オンライン参加のみを受け付け、中継会場への入場参加は受け付けません。第1部のみ、第2部のみ参加も受け付けます。

【講師紹介】

ジョシュア・フォーゲル (Joshua A. Fogel) 1950 年生まれ、カナダ・ヨーク大学歴史学部教授。日中関係史の専門家として知られ、著書は *Maiden Voyage: The Senzaimaru and the Creation of Modern Sino-Japanese Relations* (University of California Press, 2014)をはじめ極めて多数。日本の中国関連書籍の翻訳も十数冊にのぼる。

伊藤 真 (いとう まこと) 1965 年生まれ、翻訳家・東洋大学非常勤講師。プロの英語翻訳家として、ワン・ジョン (汪錚) 『中国の歴史認識はどう作られたのか』(東洋経済新報社、2014 年)、ジョン・リード 『世界を揺るがした 10 日間』(光文社、2017 年) など、歴史研究やルポルタージュの翻訳を多数手がけている。

楊 韜 (よう とう、YANG Tao) 1978 年生まれ、佛教大学文学部准教授。中国近現代メディア史が専門。著書に『メディアというプリズム: 映し出す中国・日本・台湾の歴史と社会』(晃洋書房、2018 年)、『近代中国における知識人・メディア・ナショナリズム: 鄒韜奮と生活書店をめぐる』(汲古書店、2015 年)があるほか、近年袁広泉氏と共訳の経験がある。